

縦横

1951 年サンフランシスコ講和会議を終えて帰ってきた吉田茂全権大使の口から、講和条約の精神とは全く反対向きの「日米安全保障条約」を締結したことが知らされた。国民どころか政府の要路にあった者達にとってさえ寝耳に水の事実であった。これは、進駐軍という名で呼ばれた占領軍のうちの主力であった米軍が独立後の日本に引き続き駐留しつづけるための、米国のアジア戦略に必須の片務的条約であった。

この条約更改期を迎えた 1960 年、岸信介内閣は片務性を双務性へと変更すべく更新を進めた。すでに第一次安保条約に合わせて 1952 年には警察予備隊を改変して保安隊を、ついで 1954 年には自衛隊が作られていたから、双務性を主張する装置は着々と作られてはいた。それでもこれは、戦後の平和主義に対する真っ向からの挑戦であったから世論は猛反発。いわゆる 60 年安保闘争と呼ばれる一大国民運動に発展していった。その結果、アイゼンハワー米大統領の条約調印のための訪日が阻止され、指導力を失って岸内閣は瓦解した。ここまでは紛れも無く市民の勝利だった。

あの夏、桜田門から三宅坂、平河町から外堀通を溜池・虎ノ門へと、国会議事堂を遠巻きに、大群衆の中をもみくちゃにされながら「安保反対!」「岸内閣打倒!」と叫びつつデモをしたのを、昨日のここのように覚えている。あの記憶が、近頃、不吉な予感と共に鮮明に回復してくるのを不思議に思っている。

戦前に行った戦争指導の容疑をこうむって A 級戦犯として糾弾されながら、戦後には再び首相に返り咲いて日本を過去に引き戻し、右旋回させた安保闘争のターゲット岸信介氏の孫を、人生の夕暮れになって再び指導者に迎えるなど筆者には思いもよらなかった。しかも、その孫も祖父の主張と全く同じ反動的言辞を弄している。いわく、「憲法改正」、「小型核なら所持しても憲法に抵触しない」、「道德教育で美しい日本」、「あの戦争は欧米列強に対するアジアの解放闘争だった」等々である。

痛む腰をおして、また桜田門に行かなくてはならないかと、考えるだけで気が重くなる今日この頃だが。

